

# 第3回London/Bordeaux/Milan/Argospine 手術見学旅行

## Bordeaux University Hospital (Bordeaux, ), Royal National Orthopedic Hospital (London) 見学記

新潟中央病院 整形外科 脊椎・脊髄外科センター 山崎昭義

第19回 Argospine meeting (パリ, 2015. 1.29-30) の前にJPSTSS学会が企画した病院見学に参加させて頂きましたので報告致します。まず, 参加者は2つのグループに分かれました。即ち, グループAは (以下敬称略), 熊野潔, 梅林猛(品川志匠会病院), 熊野洋(東大), 安野雅統(武蔵野赤十字病院), グループBは, 佐野茂夫(三楽病院), 竹本充(京大), 中村洋(三宿病院), 山崎昭義(新潟中央病院)です。グループAは, Royal National Orthopedic Hospital (London, 1.26), Galeazzi Ortopedico Hospital(Milan, 1.28) の順に, グループBは, Bordeaux University Hospital(Bordeaux, 1.26), Royal National Orthopedic Hospital (London, 1.27)の順に視察致しました。私はグループBの報告をさせていただきます。

1/25(日) Bordeaux に到着し, 京大からBordeaux大学に留学されて1.5年経過されている竹本充先生, 三宿病院の中村洋先生, 三楽病院の佐野茂夫先生と私の4人で夜Bordeauxのオペラハウス前のレストランでDr. Obeidを迎え, 会食しました。彼はPC持参で何例か興味深い脊柱変形の症例を提示し, 私達に意見を求めました。一般的には, 前方法はあまりやらずに後方からPSO(特に彼の方法はpedicleをすべて切除するのではなく, 上半分位を切除する), VCRなどを駆使しながら対応しているようでした。竹本先生によれば簡単な変形手術はイメージ透視やナビゲーションなしで, 複雑なものはO-armナビゲーション併用でinstrumentationを行っているとのことでした。

翌1/26(月)は, 朝からBordeaux大学病院でDr. Obeidの手術見学を行いました。症例は50代後半の女性で胸腰椎の後側弯症でした。バランスは一応とれており, 柔らかいカーブでした。多椎間(ほとんど全ての椎間)でPonte osteotomyを行い, さらに上位の椎間板切除を含むL1でのPSO(佐野先生の定義ではPSOTLIFSuperior)とTLIF L3/4も行い, T4-L4をPSによるPSFを行うというものでした(図1)。

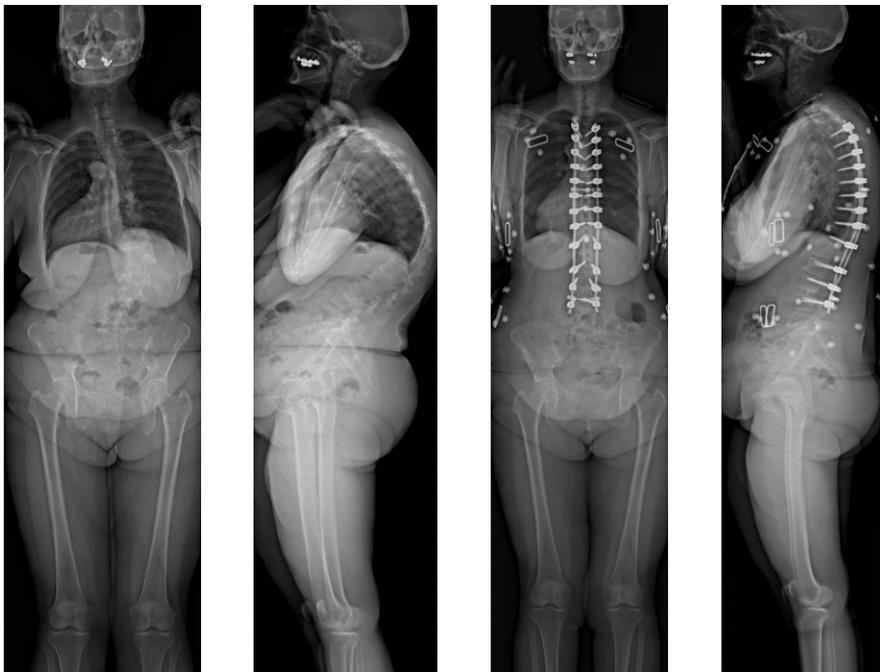


図1 術前および術後レントゲン写真

私が、視察団を代表して手洗いさせてもらいました。手洗いのやり方も日本と違い、まず石鹸で簡単に手を洗い、その後不潔な紙タオルで拭き、70%アルコールで仕上げるという方法で、何故清潔な紙タオルを使用しないのか理解できませんでした。さて、実際に手術に入りますと、展開からObeid 自らが全て行っていました。佐野先生はかねてより、日本人が出血しやすいのに何故欧米人は出血し難いのか、という疑問をお持ちで、この症例でもやはり展開やPSOのときですら出血が少なかった印象です。この手術で彼はfree handでPSを刺入しており、空間的認識能に優れているようでした。ただしPS刺入後は一本一本のPSを電気刺激しておりました。そこまで心配するのであれば、O-armナビゲーションを最初から使用すれば神経損傷も防げますし、電気刺激ではわからない血管損傷も防止できます。PSの径、長さなどのサイズは彼は一切口口にすることなく、スクラブナースが全てサイズを決めて黙って彼に手渡していたのが非常に印象的でした。また彼女が局所骨を同時進行でトリミングしている手際の良さに驚きました。彼の手術は総じて、スムーズで手際よく、周囲のスタッフもそれに同調する様にリズムカルに進んでいました(図2)。また病院スタッフは、皆見学者慣れしており、親しみやすく、丁寧に挨拶してくれたので、完全アウエーの我々にとって大変助かりました。術後はコーヒーを頂きながら、図書室でリラックスした会話をさせて頂きました(図3)。同大学に留学中の竹本充先生が車で送迎して下さい、さらにいろいろ説明して下さいだったので、非常に助かりました。また、この冬の時期はブドウの木は低く剪定されており、その作業だけでも腰を前屈するので腰に悪そうであることが容易に想像できました。特にBordeauxでは、竹本先生によれば、他の地域よりブドウの木が低いそうで、それで、この地でPSOなどの脊柱変形矯正術が発達したのでは?と勝手に思いました。さらに、竹本先生は、実は術後のロッド折損が多く、3割程度は再手術を行っており、そのため最近では3本や4本ロッドを使用していることを教えて下さいました。こういう貴重な情報はなかなか学会では表に出てこないことであり、現地に一定期間滞在していないと分からないことです。



図2 術中 左よりスクラブナース, Ibrahim Obeid, レジデント, 筆者(敬称略)

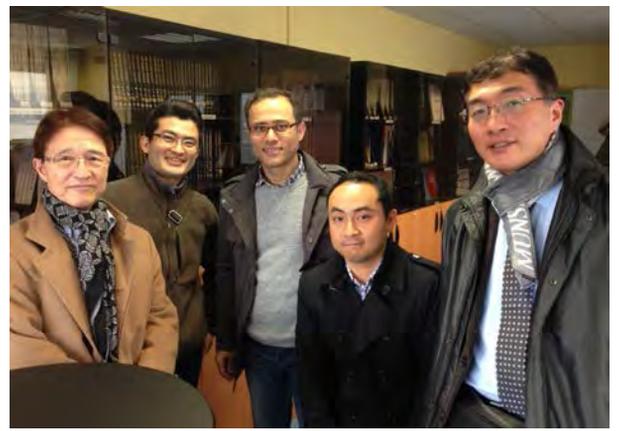


図3 Bordeaux大学医局図書室にて 左より佐野茂夫, 竹本充, Ibrahim Obeid, 中村洋, 筆者(敬称略)

同日の午後London/Luton空港に移動しました。既に前日にロンドンに入り、この日Royal National Orthopedic Hospital (RNOH)を見学されてきたばかりのグループAと我がグループBとの合同夕食会は、歴史と伝統のあるSimpson'sで行われました。大変美味しいローストビーフを皆で頂き、大満足でした(図4)。翌1/27(火)は、熊野洋先生に導かれるままにロンドン郊外北部にあるRNOHを見学させて頂きました。ここは、名前の通り、公立の整形外科専門病院であり、一行は朝の検討会から参加させて頂きました。ここでは、医師だけでなく、リハビリスタッフなども参加し、



図4 Simpson's (London)にて 右端竹本充(敬称略)

その週のオペ患者中心の検討を行っていました。皆比較的小声で話していましたので、少し聞き取り難かったです。その後、この診療チームのチーフであるMr Jan Lehovskyと主に帯同させて頂きました。ちなみに英国では、Drが偉くなるとMrと呼ばれるとのこと。彼は、訛りからして英国生まれのようですが、多くを語らず、後でHPを見ても個人情報は一切掲載されておりませんので詳細は不明です。あまり学会活動はしていないとご自分で申されていましたが、オペの腕は確かなようです。岩手の山崎健先生が以前ここに留学されておられたと言っておられました。インド人フェローに案内され、職員食堂で朝食を済ませ、いよいよオペ室に入りました。まず石膏ギブスを巻き、その上にプラスチックギブスを巻いていました。冬場はギブスを装着し、暑い時期は、装具を装着しているとのことでした。その後見学した手術は、まず上位胸椎のosteoblastomaで、後方から時々大量出血しながら部分摘出していました。同行した、竹本先生も同様の症例を経験されており、完全摘出しないと再発する旨、術後伝えましたが、今回はこれで取りあえず良いのだ、と回答されました。その後、多椎間多数回腰椎後方固定術後の固定範囲内の遷延治癒椎間のL3/4とL4/5に前方からcylinder cageを入れるオペでした。これは若い中国系のスタッフが行っていました。術中透視しながら凸側のやや尾側から上向きに苦勞して入れ直しながら入っていました。特にL4/5ではなかなか椎間が開かず、結局ほとんどが椎体内に入ってしまったが、まあこんなもんだと説明してくれました。その後、Lehovsky が手持ちの興味ある症例を次々に見せてくれましたが、側弯の症例が多い印象でした(図5)。前日グループAが見学したときと別の診療グループでしたが、皆親切で、別れ際にロンドン市内の美味しいレストランもいくつか教えてくれました。

最後に、この様な貴重な機会を企画し与えて下さりまして、大変有難うございました。



図5 Royal National Orthopedic Hospital(London)にて 左より中村洋, Jan Lehovsky, 佐野茂夫, 筆者, 竹本充 (敬称略)

付記：

山崎昭義先生のグループBと平行して手術見学旅行を行なったグループAの報告をします。1月25日(日曜)の夕方ロンドンのレストランに全員集合。翌25日(月曜日)Royal National Orthopedic Hospitalを訪問。連絡をとっていたコンサルタントとは別の脊椎外科医Mr.Hilali Noordeenの手術を見ることになった。事前の書面上の手続きが十分に間に合わなかったこともあり手術場での写真撮影は許可されなかった。我々の案内役はフェローのエジプト出身の若い医師であった。総じてRNOHの人々は多人種の構成であった。症例1はT12の圧迫骨折による後弯変形矯正術で小皮切による前方展開による矯正であった。前方支柱と椎体間固定にはcylinder cageを使用して矯正保持にrod & screwを使用した。術中のX線コントロールは殆どなく2時間半ぐらいで終了した。第2例は成人後弯症に胸椎一側にOYLが合併したものであった。Ponte osteotomy にpedicle screwingとK2Mのrail状のrod を使ったcantileverアクションによる矯正は見事であった。(図6)その夜はグループBと合同の会食。翌日1月27日空路ミラノに移動した。その夜はGaleazzi病院のDr.Roberto Bassaniの率いる脊椎グループの熱い歓迎を受けた。(図7)今年の本学会に招待予定のDr.Pedro Berjanoもかけつけてくれました。翌日1月28日はGaleazzi病院でL3PSOを見学。女性の脊椎外科医が二人いました(図8)。残念ながら途中で手術見学を終えて空路パリーへ向かった。

文責 熊野 潔



図6 Royal National Orthopedic Hospital (London)の休憩室でグループB右より  
安野雅統、梅林猛、熊野潔、熊野洋(敬称略)



図6 Mr. Hilali Noordeenと 熊野洋(敬称略)



図7 Galeazzi Ortopedico Hospital(Milan)のDr.Bassani脊椎グループと



図8 Galeazzi Ortopedico Hospital(Milan)のDr.Bassani手術中